浄土真宗本願寺派　本派本願寺羅府別院

（よくあるご質問）

１．用語について

本願寺の「本願」とは、阿弥陀仏の、いついかなる場所や時でも、すべての生きとし生けるものを差別なく平等に救いたいという願いのことです。別院は京都の本願寺直轄の寺院に与えられる名称のことです。浄土真宗は、浄土の真実の教えという意味であります。この宗派は、仏教の中でも、大乗仏教に位置づけられています。本派とは「本願寺派」の略で、羅府別院は、京都の西本願寺を本山とする世界中の本願寺派の寺院と同じく、本願寺派の一寺院となります。

２．お荘厳について（お内陣）

＜ご本尊＞

お荘厳の中央には、阿弥陀如来（仏）のお像、もしくは、「南無阿弥陀仏」と書かれた軸がご安置されています。阿弥陀如来は、法そのもの（法性）でありますので、本来色も形もありません。その為、煩悩に妨げられた私たちの眼では見ることがかなわないので、阿弥陀如来は智慧と慈悲を具えた無量の光と無量の寿命の身となり、仮のお姿（方便法身）をとって私たちにそのお姿を示されています。

＜親鸞聖人（ご本尊向かって右側）＞

浄土真宗の開祖であり、念仏の教えを明らかにされた方です。

＜蓮如上人（ご本尊向かって左側）＞

宗祖から数えて八代目の本願寺御門主であり、お念仏の勢力を拡大された中興の祖であります。

＜聖徳太子（親鸞聖人向かって右側）＞

日本に仏教を取り入れた人物です。

＜明如上人（聖徳太子向かって右側）＞

宗祖から数えて二十一代目の本願寺御門主であり、浄土真宗のみ教えを米国にまで広げられた人物です。

＜七高僧（蓮如上人向かって左側）＞

それぞれ、宗祖にいたる真実の念仏の教えを伝えられた僧侶。上段はインド、中段は中国、下段は日本の菩薩と僧侶です。

＜ろうそく＞

ろうそくの灯りは仏の智慧を意味し、私たちの無明の闇（煩悩）を照らします。

＜お花＞

供華された花は仏の慈悲を意味し、また枯れる様から諸行無常の命を意味します。

＜お香＞

お焼香・燃香は阿弥陀仏の仏徳への讃嘆を意味します。隅々にまだ行き渡ったお香のかおりは、すべての生きとし生けるものを等しく救いたいご本願をあらわします。

３．浄土真宗の儀礼

「南無阿弥陀仏」（念仏、称名）

南無阿弥陀仏を称えることを称名といいます。浄土真宗では、称名は私たちが功徳を積むための行いではなく、阿弥陀仏の慈悲が至り届いて出てくる歓喜や感謝であります。南無阿弥陀仏は、寿命無量・光明無量の智慧と慈悲を具えた阿弥陀仏にそのままお任せすることを意味します。

合掌

両手を合わせて仏に礼拝することは、智慧と慈悲が成し遂げられたお姿である阿弥陀仏への深い感謝を意味します。合掌は挨拶、感謝、尊敬を身に表した最も美しい所作といわれています。

念珠

念珠は球を紐に通した、仏事に用いるものです。この世に生きる私たちの世界を表す左手と悟りの世界を表す右手に渡して保持します。生死の世界を表す左手と仏様の世界を表す右手に念珠を通して合掌することは、これらが一つになることを意味します。浄土真宗では、「数える」ことの数珠に対して、「念ずる」ことの念珠と呼びます。

お焼香

供香は仏法への感謝と共に、法を聞く身を浄め・整える所作です。

読経

共に仏法を聴聞することへの歓びが一つとなっていくように、別々の声が調和して一味となった音です。浄土真宗では、僧侶も門信徒も一緒になって仏の徳を讃嘆します。

仏事について

１．お焼香

お焼香を済ませてからお勤めを始めます。（仏事の最後に行う場合もあります。）お焼香は、仏様とのご縁を結ぶだけでなく、尊い仏縁への感謝を表す意味があります。お香のかおりは心を落ち着かせ、仏法を聞く身を整える役目があります。仏と生死を表す両手を合わせて合掌礼拝し、念珠を保持したままお焼香します。もし勤行の前にお焼香がお済でなかったら、勤行後にお焼香いただいても構いません。

２．喚鐘

お勤めの始まりを告げる鐘が鳴った後は、仏事に集中します。鐘の音は仏様から私たちへの呼び掛けの意味もあります。

３．称名

「南無阿弥陀仏」は日本語でも中国語でもありません。元はサンスクリット語で、「私は寿命無量（慈悲）・光明無量（智慧）の仏に帰依する」という意味です。

４．読経

「経」とはサンスクリット語で縦糸を意味し、お釈迦様の言葉のことです。数多の説法と教えを説かれたお釈迦様の本当の意図は、阿弥陀仏の無量の智慧と慈悲を示されることでした。読経は先立たれた方々の平穏を願うことや、お焼香をする時のために流す音楽のためではありません。お経をとなえることは、仏様への私たちの感謝を示す行いです。また、仏様の徳を真摯に讃嘆することでもあります。様々な声が一つになった声明はその場に居合わせた人に限らず、多くの人を阿弥陀仏の智慧と慈悲に気付かせ、同時に仏法を聴聞することに誘ってくれます。

５．法話

僧侶が阿弥陀仏のご本願の心をお取次ぎいたします。

６．讃歌

読経とはまた別に、讃歌は音楽を用いた一味の音をあらわします。

本堂の壁画について＜Hideya Chiji 氏による釈尊の生涯＞

画家である Hideya Chiji 画伯は子息の Yasuhiro 氏と共に、１９６９年１１月、鎌倉からロサンゼルスへ訪れました。日に１６時間を壁画の作成に費やし、一年半後、ようやく壁画は完成します。この壮大なプロジェクトは、Hideya Chiji 氏が釈尊の冥護と米国の友人、日本のサポーターの安寧を願って別院にささげられた"ダーナ"（布施）であります。

（１枚目から４枚目はお内陣右側の入り口から正面に向かって、残る５枚目から８枚目は左側の入り口から正面に向かっての順で配置されています。）

１．白い像が摩耶夫人の身体に入ってきて王子の誕生を伺わせる予知夢

２．釈尊（シッダールタ王子）の誕生

３．四門出遊の体験のあと、王子は居城を離れて修行を始める。６年の苦行を山で過ごしてから、乳粥の施しを受ける

４．マーラによる妨害（降魔）を退けて、悟りを得る

５．初転法輪（伝道の開始）

６．病に苦しむ人々に慈悲の手を差し伸べる。城内で暴れる像を鎮める。

７．大般涅槃（釈尊の入滅）

８．阿弥陀如来と諸天

ダルマクラス

羅府別院のダルマセンターでは、仏教と浄土真宗のクラスを開講しています。クラスは入門から、既に仏教を学ばれている方向けのものなどが用意されています。クラスに関する詳細や受講を希望される方はパンフレット、又は別院のホームページ（www.nishihongwanji-la.org）をご覧ください。

入門者向けの書籍

Buddha of Infinite Light: The teachings of Shin Buddhism, by D.T. Suzuki

Ocean: An Introduction to Jodo Shinshu Buddhism in America, by Kenneth Tanaka

（『真宗入門』、ケネス田中著）

River of Fire, River of Water: Shin Buddhism, by Taitetsu Unno